

ユーロフスキーのメモ帳

エドワード・ラジンスキー 「エカテリンブルグでの銃殺」
(ОГОНЁК No. 21, 1989年)

の記事中にあったもの

古文書館に保管されていたユーロフスキーのメモ帳の再掲

[] はラジンスキーの注釈

ユーロフスキーは自分のことを「司令官」と呼称している

7月16日、ペルミから暗号電報を受け取った。ロマノフ一家根絶命令の内容のある。[紙の左上に手書きで：《ニコライを最初は5月に裁判にかける予定であった。白軍の進撃がこれを邪魔した》]

16日、夕方6時、フィリップ・ゴロシェキンが根絶命令を遂行するよう書類で指令した。12時に、遺体を搬送するために車が到着する予定。

6時に、子供を連れ出した。これをロマノフ一家及び彼らの従者達は非常に心配をした。ボトキン医師がやって来て、どうして子供を連れ出したのか質問をしてきた。説明をした、逮捕されていた子供の叔父が逃げ出して戻って来た。そして、甥に会いたがっていたからと。子供は次の日に地元(多分ツラ州)に送られた。車は12時には来なかった。1時半に着た。これが命令の遂行を遅らせた。その間に全ての準備がなされた。ナガン拳銃を持たせた12人(その中に、7 [インクで6に修正されている] 人のラトビア兵)を選抜した。彼らは判決を実行することになる。2人のラトビア兵は娘を撃つことを拒否した。

車が到着したときには、全員就寝していた。ボトキンを起こした。彼が他の者達を起こした。次のような説明をした：《町が不穏となってきたことに鑑みて、ロマノフ一家を上階から下階に移動させることが必要となった》着替えに30分。下階の。木製で漆喰塗りの、仕切りのある部屋が選ばれた(跳弾を避けるため)。その部屋から全ての家具を運び出した。小隊は隣の部屋に待機した。ロマノフ一家は何の疑いも持たなかった。司令官は彼らの所へ一人で向かい、階段を経て下の部屋へ連れ下った。ニコライはアレクセイを手で抱えていた。他の者達は各自枕や小物を持っていた。空っぽの部屋に入ると、アレクサンドラ・フェドロブナが質問をした：《何なの、椅子はないの？ 座ってはいけないの？》司令官は椅子2脚を持ってくるように命令した。ニコライは1つの椅子にアレクセイを座らせ、残りにはアレクサンドラが座った。司令官は他の者達に並んで立つように命じた。整ったとき、小隊を呼んだ。小隊が入ってくると、司令官はロマノフ一家に通告した。ヨーロッパにいる彼らの親戚達がソビエト・ロシアへ侵攻をし続けていることに鑑み、ウラル執行委員会は、彼らを銃殺することに決定した。ニコライは司令官に背を向け、顔は家族を向いていたが、我に還ったかのように、司令官を向き、質問した：《何？ 何？》司令官は急いで繰り返し、隊に準備するように命じた。誰が誰を撃つか、直接心臓を狙うように、隊では前もって打ち合わせていた。血が大量に流れ出ないようにするため。直ぐに死ぬように。ニコライはそれ以上何も言わないで、家族を向いた。他の者達は支離滅裂な嬌声を上げた。これは全て数秒の間のことであった。続いて銃撃が始まった。2分から3分間続いた。ニコライは司令官の一発で死んだ。続いて直ぐにアレクサンドラとロマノフ一家全員(全員で12人が射殺された)：ニコライ、アレクサンドラ、4人の娘ータチャーナ、オリガ、マリヤ、アナスタシア、ボトキン医師、召使いトルップ、コックのチホミロフ、もう一人のコックと女官、司令官の彼らの名前を忘れた。

アレクセイ、娘の内の3人、女官とボトキンは未だ生きていた。彼らを射殺することになった。これは直接心臓を狙っていた司令官を驚かした。驚いたことには、ナガン拳銃からの弾丸が、何かで跳弾となって跳ね返され、雹のよう

に室内を飛び回った。娘の一人を銃剣で突き刺そうとしたとき、銃剣がワンピースの銅を突き抜けなかった。このため、全ての手順は、検査が必要（脈を触ってみることなど）となったため、20分程かかってしまった。その後、遺体を運び出し、血が流れて汚れないようにするため、ラシヤを敷いたトラックに積み上げた。と、盗みが始まった：遺体の管理のため、移送の間（遺体を一つづつ運んだ）、3人の信用できる同志を配置する羽目になった。射殺するぞとの脅しのもとで、全ての盗品は戻った（金時計、ダイヤモンド付きのタバコ・ケース、その他）。判決を実行することだけが司令官に委ねられていた。遺体の処理と移送はエルマコフ（ベルフネ・イセトフスキー工場の労働者、党の同志、元懲役囚）同志の責任下にあった。彼はトラックで到着しなければならなかった。暗号の合い言葉《トルボチスト（＝煙突掃除人 *）》を使って。トラックの遅れは、司令官にエルマコフの職務の正確さに対する不安を醸し出した。それで、司令官は全作戦を最後まで見届けることを決心した。3時頃、エルマコフが準備していたはずのベルフネ・イセトフスキー工場の向こうの場所に向かって、トラックは出発した。最初はトラックで搬送し、約束の場所から荷馬車での予定であった（トラックは先まで進むことはできなかった。遠方の捨てられた坑道が、その場所として選ばれていた）。ベルフネ・イセトフスキー工場を通り過ぎて約5kmで、野营地－25人の騎兵、2人乗り4輪馬車、その他－に出くわした。エルマコフが準備した労働者達－ソビエト、執行委員会、その他の要員－であった。彼らが叫んだ第一声は：《彼らを生かさないうで連れてくるとは何ということだ？》 ロマノフ一家の処刑は彼らに委ねられていると彼らは思っていた。遺体を2人乗り4輪馬車に移し始めた。荷馬車が必要となった。非常に具合が悪かった。ポケットをまさぐり始めた。銃殺するぞという脅しをかけ、番兵を配置することになった。その時、タチャーナ、オリガ、アナスタシアが特殊なコルセットを着ていることが分かった。遺体を裸にすることに決めた。ここではなく、埋葬地で。しかし、このために予定していた坑道がどこにあるのか、誰も知らないことが明らかになった。夜が明けてきた。場所を探し出すために、司令官は騎兵を派遣した。しかし、誰も何も見つけられなかった。何の下準備もなされていないことが判明した。シャベルその他もなかった。そうこうしているうちに、トラックは2本の木の間で、道にはまり込んで動けなくなった。トラックを捨て、2人乗り馬車で移送を続けた。遺体をラシヤで隠しながら。エカテリンブルグから16.5km運んだ。コプチャキ村から1.5kmの所で止まった。これは朝6時から7時頃のことである。森で、深さ2m半の捨てられた古い坑道（かつて、金を採掘していた）を探し出した。坑道には、深さ0.7m程の水が溜まっていた。司令官は遺体を裸にし、焚き火をたくように命令した。全てを焼却するために。やって来る者を追い払うために、騎兵を周りに配置した。娘の一人を裸にしたとき、弾丸で、所々が破れたコルセットを見た。コルセットの開いた穴の中に、ダイヤモンドが見えた。明らかに、連中の目が爛々と輝いた。司令官は何人かの番兵と5人の小隊を警備に残し、連中の任を解くことに決めた。残りは解散させた。小隊は脱衣と焼却に取りかかった。アレクサンドラは亜麻布で保護された幾つかのネックレルからなる全真珠製のベルトをしていた。[余白への書き込み：各々の娘達の首には香袋に守られたラスプーチンの肖像画が、彼の祝詞の文章とともにあった] ダイヤモンドのリストが作られ、全部集めて約8kg。このダイヤモンドはアラパエフスキー工場のある小屋の地下室に保管した。1919年に、掘り返し、モスクワに運んだ。価値ある物を全てカバンに入れ、遺体で見つかった残りの物は焼却した。遺体は坑道に捨てた。価値のある幾つかの物（誰かのブローチ、ボトキンの総入れ歯）は、この時に紛失した。坑道を手榴弾で埋めようとしたときに、遺体は破壊され、幾つかに千切れた。この場所で、白軍（白軍はその後それを発見した）が見つけた千切れた指、その他を

司令官はこのように説明をする。しかし、ロマノフ一家をここに残す予定ではなかった。彼らの一時的な埋葬場所として、前もって考えていた。作戦を終了し、警備を残して、司令官は朝10時から11時（既に7月17日）に、報告書を持って、ウラル執行委員会へ出発した。そこには、サハロフとペロバロドフが居た。司令官は状況報告をし、ロマノフ一家を適当なときに捜査をすることができない（？ *）ことを残念がった。チュチカエフ（鉱山執行委員会議長）から、司令官は知った、モスクワ街道から9 kmの所に、非常に深い坑道があることを。ロマノフ一家の埋葬地として適していると司令官はそこへ向かったが、車が故障したので、直ぐにそこへはたどり着けなかった。徒歩でそこまでたどり着いて、3つの坑道を見つけた。非常に深く、水が一杯溜まっていた。ここに遺体を沈めることに決めた。遺体に石を縛り付けて。そこには、好ましくない証人となり得る警備がいた。遺体を運んできたトラックと一緒に、捜査を口実として、連中を逮捕するチェキストの乗った車も同行させることにした。帰りに、司令官は道で偶然捕まえられた2人組にあった。

様々な遅延の、偶然の出来事が起り続けた。全ての仕事を調整するため、1人のチェキストを先方に派遣した後、司令官は落馬し、酷い怪我を負った（その後、チェキストも落馬した）。坑道の件がうまく行かない場合を考えて、遺体を焼くか、水が一杯ある地面の穴に埋めるかを決めた。その前に、硫酸をかけて、識別不能まで遺体を見難くして。

漸く、町に戻ったのは17日の夕方8時。必需品を集め始めた。石油、硫酸、御者無しの荷馬車は刑務所から徴発した。11時に出発するつもりであったが、チェキストとのいざこざが遅らせた。遺体を引き出すために、ロープを持って坑道に出かけたのは、17日から18日にかけての深夜12時半頃。作戦時、坑道（第一金坑）を隔離するため、コプチャキ村で説明をする。森にチェコ軍が隠れているので、森を捜査すると。従って、口実をつけて村から出てはならないと。包囲地域に入り込んだ者は、その場で射殺すると命令を出したと。そうこうしているうちに夜が明けてきた（もう3日目の18日）。考えが浮かんだ：遺体の一部は坑道に埋める。穴を掘りあげた。その時、エルマコフの所に、彼の知り合いの農民がやって来た。彼は穴を見ることができたということだった。

仕事を止めることになった。遺体を深い坑道に運ぶことに決まった。荷馬車は丈夫ではなかった。壊れてしまった。司令官は車のため、町に向かった。トラックと2台の軽自動車、1台はチェキストのため・・・夜9時に出発することができた。500 mのところ、鉄道を横切り、遺体をトラックに積み替えた。苦勞して進んだ。危ない箇所は枕木で舗装した。何度も車は道にはまりこんだ。19日の朝3時半頃、車は完全にはまりこんでしまった。停止した。坑道まで行けない。埋めるかそれとも焼くか。ようやく、司令官が名前を忘れた1人の同志が引き受けを約束し、出かけたが、約束は守られなかった。アレクセイとアレクサンドラ・フェドロブナを焼きたがったが、間違っ、アレクサンドラの代わりに女官を焼いた。その後、焚き火の下に遺骸を埋め、再び焚き火をした。埋まった跡を隠すために。その間に、残りの者達のために、共同墓地を掘った。朝7時頃には、深さ2.5 m、広さ2.5 平方mの穴が準備できた。遺体を穴に積み重ね、顔、全身に硫酸を注いだ。識別できないようにするために。腐敗による悪臭を防ぐために（穴はあまり深くはなかった）。土や小枝を被せ、上に枕木を敷いた。その上を何度も行き来した。穴の跡は全く分からなくなった。秘密は完全に守られた。この埋葬場所を白軍は見つけることはできなかった。